中等教育研究開発室年報　第 32 号（2019 年 3 月 31 日発行）別冊電子版
2018 年度　授業実践事例

国語科　高等学校第Ⅰ学年

「鶏口牛後」（『十八史略』）
－他者の気持ちを動かす言葉の力－

授業者　増田　知子

（教育研究大会　公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 国語科 学習指導案

指導者　増田　知子

日　　時　平成 30 年 10 月 13 日（土） 第 2 限 10:35～11:25
場　　所　第 4 研修室
学年・組　高等学校Ⅰ年 2 組 41 人（男子 22 人　女子 19 人）
単　　元　漢文で学ぶ言葉の力
教　　材　「鶏口牛後」（『十八史略』）『国語総合　古典編』(東京書籍)
目　　標　1. 訓読のきまりに従って漢文を正確に読む。（知識・理解）
2. 表現に即して登場人物の行動・心情を捉える。（読む能力）
3. 他者の気持ちを動かす言葉について考える。（関心・意欲・態度）

指導計画（全 5 時間）

第一次　①自分の体験(読書等含む)から，印象に残った格言・成語とその時の状況，なぜ印象に残ったと考えられるかについてワークシートに記入する。【資料Ａ】・【資料Ｃ】
②「鶏口牛後」という成語を聞いたことがあるか，どういう意味か，知らない場合，どういう意味だと思うかについてワークシートに記入する。【資料Ａ】
③第一段落を訓読し，「是に於いて六国従合す。」とあるように，蘇秦が諸侯の説得に成功した経緯を読みとる。　2 時間

第二次　①第二・三段落を読んで，第一段落との関係を考える。（個人→グループ）
②グループでまとめたものをふまえて，蘇秦と家族との関係や思いを読みとっていき，説得で蘇秦が用いた「鶏口牛後」という成語の効果を考える。(個人→グループ)
2 時間（本時 2/2）

第三次　第一次①で記入したことについて振り返り，印象に残る言葉とはどのような状況で生まれるのか，考えを深める。　1 時間

授業について

高校一年一学期の漢文の授業で「推敲」を学習した。官吏登用試験を受けるため都にやってきた賈島は，詩を作ることに夢中になっていて思わず，大官の韓愈の行列にぶつかってしまう。賈島が事情を説明したところ，韓愈は「敲の字がよい」と言って，そのまま手綱を並べて詩について論じ合ったという話である。大官の行列にぶつかりながらお咎めなしというのは，賈島の発言の何かが韓愈の気持ちを動かしたのだろう。

漢文の教材には，日本の文化にはあまり見られない説得の場面がよく見られる。説得もまた，他者の気持ちを動かす行動の一つである。戦国時代，秦は六国(燕・斉・韓・魏・趙・楚)を圧迫して，天下の統一を狙っていたが，それに抗するための「合従策」をすすめるべく，蘇秦は趙王の後援を得て遊説の旅に出る。教科書本文には，「粛侯乃ち之に資して諸侯に約せしむ。蘇秦鄙諺を以て諸侯に説きて曰はく，『寧ろ鶏口となるも牛後と為る無かれ』と。是に於いて六国従合す。」とあり，この第一段落だけ読めば説得が成功したことはわかる。

では，それに続く第二・三段落は何のために記されているのか。第二・三段落と第一段落との関係について，国語科で実現しようとする「主体的・対話的で深い学び」に向けて，個人→グループ→全体という流れで考えさせる。言葉は人間によって発せられる。言葉を発した人物の考え・判断の形成はいかになされたのか，それを読みとることができる構成になっていることに気付かせ，蘇秦が用いた「鶏口牛後」という言葉の持つ力について考えさせたい。

さらに，この教材から学んだ「見方・考え方」を使って，学習者がこの単元の最初に書いた

「印象に残った言葉，その言葉が発せられた状況，なぜ印象に残ったか」を見直すことで，「他者の気持ちを動かす言葉の力」の認識がどう変わったか，自己評価させたいと考えている。

題　　目　「鶏口牛後」―他者の気持ちを動かす言葉の力―

本時の目標

1. 漢文訓読の知識を用いてまとまった文章を読み，漢文訓読に慣れる。（知識・理解）
2. 表現に即して登場人物の関係・言動を読みとる。（読む能力）
3. 「鶏口牛後」という成語の効果を考える。（関心・意欲・態度）

本時の評価規準（観点／方法）

1. 漢文の訓読が正確にできている。（知識・理解／観察）
2. 登場人物の関係・言動を，表現に即して読みとれている。（読む能力／観察・発問と応答）
3. 蘇秦の説得の巧みさを考えることができている。（関心・意欲・態度／観察・発問と応答）

本時の学習指導過程

学習活動	指導上の留意点	評価の観点と方法
(導入) 前時までの振り返り	・蘇秦が諸侯の説得に成功したこと(第1段落)を確認し，それに続く第2・3段落の役割・意味について，前時にグループで考えたものを，全体で確認する。(プリント配布) 【資料B】	・他グループの読みとりを理解している。(観察)
(展開) 1. 第2段落を訓読する。	・一斉読み	・漢文の訓読が正確にできている。(観察)
2. 第2・3段落の役割・意味を考える。	・第2段落の中で，時間的に切れているのはどこか，考えさせる。 ・蘇秦に対する家族の反応が何を意味するのかを考えさせる。(個人→グループ)	・漢文の語句に注目して読みとることができている。(発問と応答) ・登場人物の関係・言動を，表現に即して読みとることができている。(発問と応答)
3. 蘇秦の説得の巧みさを考える。	・「鶏口牛後」という成語が持つ意味を考えさせる。 (個人→グループ)	・蘇秦の説得の巧みさを考えることができている。(発問と応答)
(まとめ)	人を動かす言葉とはどういうものか，考えさせる。	
備考		

資料A

国語総合（漢文）「鶏口牛後」ワークシート　（　）組（　）番　名前（　　）

Ⅰ 自分の体験（読書等含む）から、印象に残った格言・故事成語、その言葉を知った状況、なぜ印象に残ったと考えられるかについて、記入する。（読書等の場合は出典も記す。）

印象に残った格言 故事成語	その言葉を知った状況	なぜ印象に残ったと考えられるか

Ⅱ「鶏口牛後」という成語を聞いたことがあるか。

（　ある・ない　）

「ある」と答えた人→どんな意味か。
「ない」と答えた人→どんな意味だと思うか。

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

Ⅳ「鶏口牛後」の学習をふまえ、「Ⅰ自分の体験（読書等含む）から、印象に残った格言・故事成語、その言葉が発せられた状況、なぜ印象に残ったと考えられるかについて、記入する。」で記入した文章を振り返り、「他者の気持ちを動かす」ことについて考えたことを記入する。

【1班】メンバー（　資料B　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第二三段落では、お金と地位、人望は大切であり、麦のような大国でないところでも、長になることで、それらは手に入れることができるということが書かれていて、それは第一段落で蘇秦が述べた「寧為鶏口、無為牛後。」の意味を表している。

【2班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第一段落――蘇秦がおこした出来事（六国同盟への働きかけ）

第二・三段落――蘇秦の性格を表す話

【3班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第一段落の意味＝第二・三段落

仕事上の成功とプライベート（家庭）の充実は比例しない。という教訓？

【4班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

2段目のにおいて「鶏口」の立場は蘇秦であって、「牛後」の立場は「妻」「兄嫁」

【5班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第二…六国従合としに蘇秦についての従合する前後の周りの人の対応について。プライベート。

第三…六国従合した後、取り残された秦について。

【6班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第一段落が「鶏口牛後」の使われ方――第二、三段落が具体例
・鶏：遊説家として人の上に立つ
・牛：農民

第一段落で蘇秦の業績を説明し、第2、3段落で蘇秦の人生を説明することで蘇秦の人間性や農民でいるより遊説家として頑張るほうが良いと主張している。

【7班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

【8班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

一段落は、六国をまとめたこと。
二、三段落は成功する前と後の親歳の態度。

【9班】メンバー（　　）

Ⅲ「鶏口牛後」第二・三段落と、第一段落との関係を考えてみよう。

第一段落で蘇秦の功績も記し、
第二、三段落の後日談で功績の影響も記して、
彼の功績の偉大さを強調している。

資料C

Ⅰ 自分の体験（読書等含む）から、印象に残った格言・故事成語、その言葉を知った状況、なぜ印象に残ったと考えられるかについて、記入する。（読書等の場合は出典も記す。）

印象に残った格言 故事成語	臥薪嘗胆
その言葉を知った状況	小学校から友達の男子が小六くらいの時に、この四字熟語の良さについて語り始めた。
なぜ印象に残ったと考えられるか	その友達の熱力がすごかったから。

印象に残った格言 故事成語	目には目を
その言葉を知った状況	歴史の教科書を眺めてハンムラビ法典のページを見たとき。
なぜ印象に残ったと考えられるか	当時「倍返しだ」が流行していたから、似た意味の言葉が印象に残った。

印象に残った格言 故事成語	百聞ハ不如カ一見ニ。
その言葉を知った状況	小説で、主人公が高校選びをしているときに、憧れの先輩に言われていた。（小3くらい？）
なぜ印象に残ったと考えられるか	「なるほど！たしかにいろいろ説明をきくより一回見れば（一瞬で理解できる）」と思った（ような気がする）

印象に残った格言 故事成語	不思議の勝ちあり 不思議の負けなし
その言葉を知った状況	ネットニュースで野球の人とくが言っていたのを聞いた、読んだ。
なぜ印象に残ったと考えられるか	偶然勝ったり、合格することがあっても偶然負けたり落ちることはなく絶対理由があるというのがグサッときたから。

印象に残った格言 故事成語	その言葉を知った状況	なぜ印象に残ったと考えられるか
百里を行く者は九十を半ばとす	便覧で調べて良いなと思った。	自分の受験時代と重ねてみたら、とても良い言葉とおもったから

印象に残った格言 故事成語	その言葉を知った状況	なぜ印象に残ったと考えられるか
初志貫徹	中三のときのクラスのスローガンだった	最初にクラスのみんなで決めた目標を、年間最後まで守り通した思い出があるから。

印象に残った格言 故事成語	その言葉を知った状況	なぜ印象に残ったと考えられるか
身の丈を知れ	本で読んだ	自分は他の人と比べて背がすさいので、そういう部分を補うために、自分の現実を知って、何ができるかを考えることだと思ったから。

印象に残った格言 故事成語	その言葉を知った状況	なぜ印象に残ったと考えられるか
蛇足	最後に余計な一言を言ってそれを終えたとき	初に意味を教えられ蛇に足がつくのは余計なと解釈した印象が浮かんだから。

鶏口牛後（『十八史略』）

板書

三 ①

蘇秦 ＜師鬼谷先生＞ 学問

「見とけよ」困而帰 ＜発憤 いきづまる

遊説家としての存在を否定された。

妻 不下機

嫂 不為炊

・蘇秦大事にされていない。居ないことになっている。・無視

一

蘇秦 …王としての存在を否定

鄙諺「寧為鶏口無為牛後」 ＝ 鶏口 ＜ されより国

諸侯（韓王） → 発憤「自分は王でありたい！」「秦の「後」にはならん！」

二 ②至是 六国従合

蘇秦 ＜為従約長 并相六国 故郷＞ 行過洛陽

妻 嫂 → …奈…入りくだって従う。

鄙諺 ↓ 説得のことば

自己の体験・哲学に基づくもの

・他者にとって意味あるもの

実践上の留意点

高校一年の漢文教材として教科書に載る史話は，『十八史略』を出典とするものがほとんどである。史話の面白さはその時代・その社会に生きた人間を，いかに生き生きと浮かび上がらせることができるかであるが，高校二年になって学習する『史記』等と違い，ある出来事に至るまでの過程や登場人物の心情等が，『十八史略』では描かれていないことが多い。この「鶏口牛後」においても，「粛侯乃ち之に資して諸侯に約せしむ。蘇秦鄙諺を以つて諸侯に説きて曰はく，『寧ろ鶏口となるも，牛後と為る無かれ』と。是に於いて六国従合す。」とあるだけで，この鄙諺がどのような状況で使われ，なぜ説得が成功したのかがわからない。そこで，『十八史略』で「鶏口牛後」を学習するにあたり，話の構成に着目して，説得が成功した理由を考えさせたいと考えた。

しかし，高校一年としては長文の漢文になることに加え，学習者にとって説得の場面は，あまり馴染みのないものと思われる。そこで，指導計画第一次の①で，自分の体験から，印象に残った格言・成語を思い出させ，その時の状況，なぜ印象に残ったと考えられるかについて考えさせるという学習を導入とした。これは，本時（第二次②）で，蘇秦が使った「鶏口牛後」という語が，１．自己の体験（哲学）に基づくもの　２．他者にとって意味あるもの　という二つの条件のもとで説得に使われていたことを読み取ったことをふまえて，第三次で自分の体験を振り返り，印象に残る言葉について考えを深め，「他者の気持ちを動かす言葉の力」の認識がどう変わったか，自己評価するという学習へと繋がるものである。

本時は，第二次の①（前時）で，ワークシートを使って「第二・三段落を読んで，第一段落との関係を考える」という課題についてグループで考えたものをプリントして，それを全体で確認するというところから入った。授業後の質疑応答の中で，この部分について，「生徒の意見と根拠の区別がわかりにくかった，生徒の最初の読みの根拠がわからなかった。」というご意見を頂いたので，第一段落では，この話の背景に関すること―戦国時代，遊説家―についてと，登場人物とその言動を確認して，蘇秦の説得が成功したことを読み取るのみに止めたこと，第二・三段落については，何のヒントも与えておらず，わからない語を調べながら考え，グループで意見を出し合いながら，漢文に向かい合っていたということ，根拠をふまえた意見というよりも，自分たちの読み（予想）と考えてもらいたいということを説明した。

また，蘇秦が本当にそう思ったのか，編者がそのように伝えようとしたのかという質問を頂いた。これについては，語りの構造に関するものであるため，後の協議会のテーマに含めた。

質疑では，語りの構造に関するものの他に，グループ活動の在り方，問いの在り方に関する質疑が多く出された。今年度の協議会は，参加者を小グループに分けて本校の教員も一緒に入り，以下の３つのテーマについて意見交換を行うという形態を採った。

①　グループ活動の在り方

いわゆる「できる子」の発言によってしまうのではないか。

学習者の思考の様子が見えなかった。ツールを与えても良かったのではないか。

②　語りの構造について

「語り」という視点を持つことによって，学習者はどういうことができるようになるのか。

→　読み手として介入できる。入り込める。自分と重ね合わせることができる。

③　問いの在り方

テキスト外の問いは自覚していない自分と向き合うことができる。

といった意見が出された。

話の構成に着目して，説得が成功した理由を考えさせたいと考えた授業であるが，時間の流れで捉えれば，第二段落の間に第一段落が入るという構成に気付かせ，第一段落に第二段落を被せて再構成することで，何が読み取れるかを考えさせると，「鶏口牛後」という鄙言が，いかにして説得の言葉となり得たかということが見えてくる。

『十八史略』をこのように扱うことで，ある出来事に至るまでの過程や登場人物の心情等が描かれている『史記』とは異なる角度から，「深い学び」へとアプローチすることができると考えた。